

- ・食事サービス事業研究会
- ・ゆたか福祉会・あいち福祉協同組合

- ・みなと医療生協
- ・センター事業団高齢者協同組合

第3分科会

環境を守る製品・エネルギー・システムづくり

リユースびんの普及を 共同作業所づくり運動と消費者運動との協同で

ーリサイクル洗びんセンターがオープンー

菅井 真（社会福祉法人きょうされん理事・リサイクル洗びんセンター所長）

はじめに

1994年4月1日、東京都昭島市の中神工業団地の北端に「リサイクル洗びんセンター」（以下、「センター」と略す）がオープンした。

このセンターは、障害者作業所の連絡会である共同作業所全国連絡会（全国650ヶ所の作業所・施設で構成 以下、「共作連」と略す）と東都生活協同組合（組合員数東京都内13万人 以下、「東都生協」と略す）とが協同の事業としてその建設を進めてきたもので、知的障害者を対象とする精神薄弱者授産施設（通所）・定員30名の「第1リサイクル洗びんセンター」と、精神障害者を対象とする精神障害者通所授産施設・定員29名の「第2リサイクル洗びんセンター」との二つの施設が一体化した、大変ユニークな障害者の働く場である。

1 「センター」の設立経過

1991年2月に東都生協と共作連の間で締結した「助け合い協同事業に関する提携書」をもとに、吉祥寺にある東都生協の店舗「むさしのハウス」では、全国の障害者作業所の自主製品販売コーナーが設置された。また、同年4月からは、社会福祉法人ときわ会が経営する精神障害者の共同作業所「福祉工場エバーグリーン」（東京都小平市）に対し、東都生協の自主ブランド商品「米ぬか石鹼」の委託製造が行われることになった。それは、

全国的にも、1980年代半ばからはじまった共同作業所づくり運動と生協運動との提携活動に一層多様な広がりがみえ、「生協と共同作業所の提携活動全国交流会」（1989年より毎年開催）を軸に新たな方向を模索している矢先のことであった。

そうした折、東都生協では、環境保全運動として、取引業者である食品メーカーと共同で、使用済みびんのリユース（再利用）運動を本格的に進めていくための「洗びん工場」建設構想を数年かけて練り上げていた。

他方、共作連では自らの組織機構改革作業が進行中で、そのなかで、法人格取得が課題となり、「社会福祉法人きょうされん設立のために、東京都内で何らかの社会福祉事業を起こし、それを共作連が直轄で経営する」という方針を、1992年5月の共作連第15回総会で決定する段に入っていた。

こうした両組織の動きを背景に、東都生協から共作連に対し「リサイクル洗びんセンター構想」が提案され、双方で協議に入ることになった。1992年5月に、両組織ともに「センター」建設の方針を決定。土地の確保に関しては、財源上の問題と東都生協の支部（配送）センター新設計画との関係から、都内多摩地域を候補地とし、1992年の秋に、昭島市内の準工業地域の557坪を東都生協が先行取得。そのうち317坪が「センター」用敷地として確保されることになった。さらに、同年11月に共作連と東都生協の役員を中心にした社

会福祉法人設立準備会を発足させ、東京都（福祉局法人指導部）との協議に入り、総工費10億6千万円に及ぶ一大事業を、全国的な大募金運動を軸に、実質1年数カ月間にやり切るという、すさまじい運動の結果として「センター」が誕生することになったのである。

2 「センター」の特質

「センター」は全国的にみても幾つかのすぐれた特徴をもつもので、全国の共作連関係者が、モデル事業として取り組むだけの意義ある内容を含んでいる。

第1に、共同作業所（障害者施設）と消費生活協同組合の事業提携の在り方に、一つの飛躍をもたらしたことが指摘できる。すなわちこれまでは、作業所づくり運動の署名活動等に生協組織からの応援を得ることに始まり、生協のイベントで障害者の作品を販売する、さらに、その作品を生協の商品として取り扱う、あるいは、生協の仕事の一部に作業所のメンバーが参加する等といった範囲の提携活動が主であった。それを今回は、消費者団体としての生協と、生産者組織としての役割を担い得る障害者作業所（授産施設）が協同して、食料品びんのリサイクル（リユース）という消費者（生協組合員）の要求にも合った、本格的な障害者の仕事を創造したのである。

第2に、障害者の仕事として、地球環境問題に立ち向かうという、きわめて今日的で、社会的にも意義ある内容を確立したことである。しかも、これまで回収した牛乳パックを材料にした紙製品作りや、古紙回収、空き缶回収を作業種目とするなどの取り組みはあったものの、それは作業工賃の面からすると、本格的な事業とは言いがたい面があったのが実情であり、今回、それが障害者の所得保障の面でも一定の水準（具体的には一人5万円の給与）を確保する前提で実現できたことは、きわめて意義深いものがある。

そこには、生協との提携を越えた、生協と取引のある食料品メーカー、さらにそこと取引がある、びんメーカーまで巻き込んだネットワークづくり

と、装置産業といわれるだけの生産設備を確保したことが基礎にある。

第3に、精神障害者（授産施設）と知的障害者（精神薄弱者授産施設）との合築形態を全国で初めて、法定施設として実現できたことである。それは、「障害種別を越えた共同利用」という、共同作業所づくり運動を背景にした当然の主張ではあったものの、実際実現するには縦割り行政の壁は未だ厚いものがあり、それを可能な限りで取り除きながら実現にこぎつけた意義は大きい。

3 運動の到達点

4月1日、センターはオープンした。しかし、洗びん作業そのものが、みんな初めてのこと。しかも、職員も障害をもったメンバーも、名前と顔とがしっかり一致すらしていないなかで迎えた施設開所。巨大としか言いようのない洗びん機。毎日6千～7千本というびんの物流。予想はしていたものの、大変な仕事のスタートとなった。毎日、都内各地にある28ヶ所の東都生協の支部（配送）センターから搬入されてくる空きびんをスムーズに処理しきれず、ストックヤードとして使用されている屋上には、びんを積んだカゴ車が身動きが取れないほどに一杯になる日々が続いた。

そして、その半年間の事業の取り組みは、新たな課題をすでに提起してきている。

第1に、操業資金の不足からくる借入金の償還財源問題がある。

東都生協としては、組合員が商品注文の際に利用する注文用紙に、一口500円の募金欄も設け、全組合員に依拠した募金運動を展開し、数カ月の間に、業者寄付を含む、4000万円を越える資金づくりに成功。最終的には、5300万円を集めきることができた。一方共作連も、全国15ヶ所の都道府県にある支部を中心に、「きょうされん列島縦断コンサート」なども開催し（全国で3万人を超える観客を動員できた）、その自己資金づくりに取り組んできたものの、やはり相当額の借金を抱えてのスタートとならざるを得なかった。この借金は社会福祉法人の場合、制度上寄付金をもって当

てることになっており、今後の運営上、長期的な努力がもためられている。

第2に、主に東都生協の運動課題となるのであるが、びんの回収本数をさらに飛躍的に拡大させ（当然それと同時に、びん商品の供給高を高めることも必要である）、同時に、今回新たに製品化した4種類のリユース用統一びんを普及することが重要になっている。

第3には、リユースびんの利用を社会的システムとして普遍性をもったものにしていくことが不可欠で、そのためにも、環境総合負荷測定なども実施したうえで、リユースシステムの科学的優位

性をも明らかにした取り組みが求められている。

その他にも事業の安定化を図っていくうえで、ストックヤードの確保、それと合わせて、地元昭島市のゴミ行政との連携等々、課題は山積状態にある。そうした課題を乗り越えてこそ、今回の事業が成功したといえるわけで、本報告は、センターオープンにあたっての中間的なものにすぎないことを、最後に記して、報告としたい。

第4分科会

女性たちの仕事おこし

歴史を作る「女性たちの仕事おこし」

佐藤 和 夫（千葉大学教育学部助教授）

I

インドに行く機会があって、ユニセフの集会で知り合ったプレマ・プラヴという女性の活動家に会った。ボンベイに住む彼女のオフィスを尋ねるまでに見たインドの女性たちの地位はまったく気分が沈んでしまうほどのものであった。男と女は完全に分離され（それでもデリーやボンベイのような大都市の中心部は日本と変わらないけれど）、結婚した男女以外が町の中を歩くことさえも強く禁止されている。何よりショックだったのは、インド中央部のジャイプールという町を旅行したときだった。通りから見る女性たちは、誰でも目が向くほどの鮮やかなサリーを着ているのだけれど、彼女たちは一様に顔を上げることさえせず、下を向いたままに絶望したように歩いている。少なくとも、彼女たちが屈託のない笑い声の中で仲間と一緒に歩いている姿を見ることはなかった。

インドでは夫が死ねば一緒に殺されたとか、持参金が少ないという理由で夫から焼き殺されもす

という話を聞いていた中でこんな状況を見れば、インドの女性はどれほど厳しい生活をしていることかと気が重くなった。実際、地域によって極端なほどに違いがあるとはいえ、女性が人間扱いされていない状況に決定的な地域差があるとは思われなかった。

ところが、ボンベイの彼女のオフィスを尋ねたときに、今までとはまったく異なる女性たちの姿に出会い、何だろうと不思議に思った。そこに集まっている女性たちはけっして経済的条件という意味で生活に余裕があるようには思えなかったが、みんなとても解放された表情をしていた。何よりも心のゆとりと笑いがあった。それが彼女の組織している活動と関係があると分かったのはまもなくのことだった。

II

プレマさんがしている活動とは、夫と死別や離別した女性たちの組織なのだという。インドでは、死別離別などをした女性の地位はとりわけて悲惨